

「～をそむく」「～にそむく」をめぐって

桑山俊彦

【キーワード】「～をそむく」、「～にそむく」、格助詞「を」、格助詞「に」、
「そむく」

はじめに

たとえば「平家物語」に、「祇王、うしとおもひし道なれども、おやのめいをそむかじと」(巻一)のように、「そむく」という動詞に上接する格助詞として「を」が用いられている一方で、「平家日ごろは朝家の御かたためにて、天下を守護せしかども、今者勅命にそむけば」(巻五)のように、「そむく」に上接する格助詞として「に」が用いられている例が見られる。

このように、動詞「そむく」に上接する格助詞に「を」と「に」が両用されているのである。

しかし、現代語では、動詞「そむく」に上接する格助詞としては、もっぱら「に」が用いられ、「を」が用いられることはない。

本稿では、「～をそむく」「～にそむく」が時代的にどのように関連し合っているか、また、「～をそむく」「～にそむく」が両用される対象語の存在をどうとらえるか、などについて考察を加えたいと考えている。

1 各資料に用いられている「～をそむく」「～にそむく」の用例数

この点に関しては、信太知子氏が「『～をそむく』から『～にそむく』へ——動作の対象を示す格表示の交替——」と題する論文^(註1)の中で、既に同種の表を作成しておられる。その中で同氏は、「そむく」を語義の上から

A 背を向ける

B さからう、従わない

の2つに分けて示しておられるので、私もこの分類を用いることにした。

現在までに刊行された索引を主として利用し、平安時代以降明治時代までの「～をそむく」「～にそむく」の用例数を一覧表にして示したのが表1である。「～をそむく」「～にそむく」の用法の上限を探るのが目的ではないので、奈良時代の資料は取り上げなかった。

なお、用例を採集するにあたって、格助詞「を」や「に」を伴わない「そむく」のみの用例は含めなかった。しかし、「～をばそむく」「～にもそむく」などの

(2)

ような、「を」や「に」の後に助詞を伴ったものは含めた。

表1

資 料 名	A		B	
	を	に	を	に
竹取物語	0	0	2	0
源氏物語	26	1	9	4
今昔物語集	4	0	15	1
平家物語	1	1	29	8
徒然草	1	0	0	2
虎明本狂言	0	0	3	1
御伽草子	0	0	11	1
天草版平家物語	0	0	16	3
天草版伊曾保物語	0	0	6	0
* 日葡辞書	1	0	8	2
* 日本大文典	0	0	7	3
醒睡笑	0	0	1	1
中華若木詩抄	0	4	0	1
浮世風呂	0	0	1	0
夢酔独言	0	0	0	3
* 和英語林集成	1	1	2	2
浮雲	0	0	0	10

*を付した資料は全用例を調査したものではない。
資料の配列順は必ずしも年代順ではない。

表1について、以下分析を進めていきたい。

(A欄について)

①「源氏物語」中の「背を向ける」意の「～をそむく」は26例と際立っているが、そのうち「世をそむく」が23例を占めている。「世をそむく」は「俗世間に背をむける。隠遁(いんとん)又は出家する。世をのがれる。」(日本国語大辞典による)意を表わす成句的な言い方と言えよう。残る3例も「うき世をそむく」「世間をそむく」「世中をそむく」というように、いずれも「世をそむく」と同じような意味を表わしている。

②「今昔物語集」中の「背を向ける」意の「～をそむく」は4例であるが、「世をそむく」が2例、「世の中をそむく」が1例を占める。残る1例は「輒ク罵り耻シメテ眼ヲ戻(そむ)キ」(巻二 37話)という、「白眼視する」意の

例である。

「平家物語」「徒然草」「日葡辞書」「和英語林集成」の各1例も「世をそむく」という例である。

③「背を向ける」意の「～をそむく」の用例はほとんどすべてが「俗世間に背を向ける、もしくは出家する」意で占められている。この意味で用いられるのはほぼ鎌倉時代あたりまでと言ってよいのではないか。「日葡辞書」「和英語林集成」の用例は辞書という性格上、古くからある用法を収録したものと考えられる。

④「背を向ける」意の「～にそむく」は、用例そのものが少ないが、「源氏物語」では「火のかたにそむき給へる」（東屋）、「平家物語」では「壁にそむける残の燈の影」（灌頂卷）というように、「火」「壁」といった語を伴っている。しかし、「中華若木詩抄」では漢詩をもととする「花」「春」「人」などの語を伴っていて、他の資料といささか異なった姿を見せている。

なお、信太氏の前掲論文(注1)では「漢書列伝竺桃抄」「史記抄」「四河入海」「蒙求抄」(以上4点は語彙索引によるもので全用例調査ではないとのこと)「毛詩抄」などの抄物を調査されているが、「背を向ける」意の「～にそむく」の用例はないようである。

(B欄について)

①「～をそむく」は、室町時代あたりまでは用例数が多いが、その後減少している。「天草版平家物語」に16例の用例を数えるが、「平家物語」との関連の深さを反映したものと言えよう。

②「～をそむく」における「そむく」の対象語は、用例数の多さもあるが、多彩な語が用いられている。これについては次章以降に詳述する。

③「～にそむく」は「源氏物語」以降、各時代の資料に見られるが、室町時代末頃までは数量的には「～をそむく」の方が優勢である。

「夢酔独言」「浮雲」の用例を見ると、江戸時代末期から明治時代に至ると「～をそむく」の用例が姿を消し、現代と同じように「～にそむく」のみになってくることがわかる。

なお、「和英語林集成」の「おきてをそむく」「やくそくをそむく」は古い用法を収録したものと考えられる。

2 「～をそむく」「～にそむく」における「そむく」の対象語

表1に示した用例すべてについて、「～をそむく」「～にそむく」における「そむく」の対象語を、おおまかに意味分類して示すことにする。

なお、配列は歴史的仮名遣いによる五十音順である。

(4)

〔～をそむく〕

(1)人の行動を制約する命令、意向など

叡慮	おきて	仰(おほせ)	仰せあらん事	仰(おほせ)ごと		
宣(おほせごと)	御意	禁制	下知	国宣	定め	式目
詔命(ぜうめい)	宣旨	勅	勅裁	勅定(勅説)	勅宣	勅命
法度	法	命(めい)	約束	遺言		

(2)権力、支配者、上位者など

木曾	君	源氏	舅	平家	門徒	頼朝
----	---	----	---	----	----	----

(3)規範、先例、慣習、世間、思慮など

憂へ	思ふ所	心	善	先例	母の義	万事	本意	世
世の中	礼義							

(4)人を超越した存在

デウス	天
-----	---

〔～にそむく〕

(1)人の行動を制約する命令、意向など

叡慮	旧約	御意	下知	大法	勅命	法
----	----	----	----	----	----	---

(2)権力、支配者、上位者など

主人	人	文三(=人名)	門徒
----	---	---------	----

(3)規範、先例、慣習、世間、思慮など

意見	義理	人望	俗	道理	徳	本意	みち	礼義
----	----	----	---	----	---	----	----	----

(4)人を超越した存在

御内証(御内證)	神慮	デウス	天命	冥慮
----------	----	-----	----	----

(5)その他

あかり	壁	自然	花	春	火のかた
-----	---	----	---	---	------

上記の分類をもとに次の2点を指摘したい。

①「～をそむく」の(1)、人の行動を制約する命令、意向などに含まれる語は多種にわたっていることがわかる。

しかし、多種にわたると言っても、例えば天皇の命令の意味で、詔命、勅命、

勅定(勅説)、勅宣、勅、宣旨など、似通った語が多いことに留意したい。

②「～をそむく」の(2)、権力、支配者、上位者などに含まれる木曾、源氏、平家、頼朝などの語は、いずれも「平家物語」「天草版平家物語」の中で用いられたもので、題材との関連でとらえるべきものである。

ところで、山田みどり氏は「『～をそむく』と『～にそむく』」(成蹊国文第14号所収)と題する論文(注3)において、まず、「～をそむく」「～にそむく」における「そむく」の対象語の相違を指摘しておられる。

すなわち、「～をそむく」では、対象語は具体的対象、「～にそむく」では抽象的対象という相違があること。そして、この識別が困難な用例では、「～をそむく」は積極的な意志が働いている場合に用いられ、「～にそむく」は積極的な意志ではなく、客観的な状況としてはずれている場合に用いられると指摘された。綿密な分析で説得力のある結論を導き出されたと考えるが、私は、叡慮、御意など、「～をそむく」「～にそむく」に両用されている語の存在に、現時点ではまだ十分な説明をしかねているので、さらに今後も検討を重ねていきたいと考えている。

3 「～をそむく」「～にそむく」に両用されている対象語

前章に示した「そむく」の対象語を改めて眺めてみると、「～をそむく」「～にそむく」の双方に登場する語がいくつかあることに気づく。すなわち、(1)からは叡慮、御意、下知、勅命、法の5語、(2)からは門徒の1語、(3)からは本意、礼義の2語、(4)からはデウスの1語である。

そこで、それぞれの語について、どの資料に用いられているかを示せば次のようになる。

(ア) 叡慮	～をそむく	日葡辞書	1例
	～にそむく	平家物語	3例
		天草版平家物語	1例
(イ) 御意	～をそむく	日葡辞書	1例
		日本大文典	1例
	～にそむく	虎明本狂言	1例
(ウ) 下知	～をそむく	天草版平家物語	1例
	～にそむく	夢酔独言	1例
(エ) 勅命	～をそむく	今昔物語集	1例

(6)

	～にそむく	平家物語	1例
(オ)法	～をそむく	御伽草子	2例
		日葡辞書	1例
	～にそむく	平家物語	1例
		御伽草子	1例
		天草版平家物語	1例
(カ)門徒	～をそむく	今昔物語集	1例
	～にそむく	今昔物語集	1例
(キ)本意	～をそむく	御伽草子	1例
		天草版平家物語	1例
		日葡辞書	1例
		日本大文典	1例
	～にそむく	浮雲	1例
(ク)礼義	～をそむく	平家物語	1例
		天草版平家物語	1例
	～にそむく	徒然草	1例
(ケ)デウス	～をそむく	日本大文典	1例
	～にそむく	日本大文典	1例

「～をそむく」「～にそむく」に両用されている対象語は、9語に上る。そしてこの場合の「そむく」は、いずれも「さからう、反する、従わない」の意味である。この点から見れば、山田みどり氏の、積極的な意志が働いているか、客観的状況としてはずれているか、という考え方も首肯できるように思われる。

しかし、(ア)から(ケ)までに示した語のうち、叡慮、御意、法、デウスに関して、その用いられている資料が室町時代のものである点に、留意する必要があるように思う。

例えば最後に掲げたデウスは、「日本大文典(ロドリゲス)」に次のように記述されている。

Ni (に)のつく与格かVo (を)のつく

対格かを要求する中性動詞

○恐れる・背く・離れる,その他それに似た意味の動詞はNi (に)のつく与格

かV○(を)のつく対格かを要求する。

<中略>

Somuqu(背く)。例へば, Deusuo, l. Deusni somuqui tatematcuru. (デウスを,
又は, デウスに背き奉る。)

(土井忠生氏訳 381^頁)

このように、「そむく」は室町時代末期から、上接する格助詞として「を」「に」のどちらも用いられることが、この記述から判明する。この点を考慮に入れるならば、観慮、御意、法などの対象語が「～をそむく」「～にそむく」に両用されていることも十分理解できる。

室町時代の資料に、「～をそむく」「～にそむく」に両用される語が多く見られることは、格助詞「を」と「に」の機能に変化が生じていることを予想させるものである。当時の両助詞の機能を精査することによって、動詞「そむく」とのかかわりを明らかにしていく必要がある。

おわりに

平安時代から明治時代に至るまで、「～をそむく」「～にそむく」の形で用いられる語例を取り上げ考察を加えてきた。

「～をそむく」「～にそむく」については、室町時代頃が転換期に当たるように思われる。動詞「そむく」の意味上の変化とともに、「そむく」に上接する格助詞「を」と「に」の機能にも、変化が生じつつあるのではないかと考えられる。

今回は限られた資料の分析に終わってしまったので、今後さらに多くの資料の分析を心がけていきたいと思っている。

注1 信太知子「～をそむく」から「～にそむく」へ——動作の対象を示す格表示の交替——

『国語語彙史の研究』二 (1981年5月)

注2 「日本大文典」B欄、「を」7例、「に」3例としたが、第3章の(ケ)で取り上げたデウスの例を除いてある。

注3 山田みどり「～をそむく」と「～にそむく」

『成蹊国文』第14号 (1980年12月)

使用した索引類を次に掲げる。

竹取物語総索引

源氏物語大成

今昔物語文節索引

(8)

平家物語總索引

改訂版徒然草總索引

大藏虎明本狂言集總索引

御伽草子總索引

天草版平家物語總索引

文祿二年耶蘇会板伊曾保物語 本文・翻字・解題・索引

醒睡笑(索引編) 未刊

中華若木詩抄文節索引(卷之上・中・下)

夢醉独言總索引